
獅子の門前を眺め 竜の背を渡る

kishegh

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獅子の門前を眺め 竜の背を渡る

【Nコード】

N3388U

【作者名】

k i s h e g h n

【あらすじ】

俺が何か悪いことをしたのか？

俺が望んでいる事は昔から変わらないのに、如何でもいい厄介事が俺に押し寄せてくる。部長の話では無いが、かの有名な犯罪都市ボルファストと俺の周囲の空間は業務提携をしているのかもしれない。悪人変人奇人にバカども、もういい加減うんざりだ。

異性問題ももう手一杯なので、これ以上はいらないんだよ？分かっているかい？神様とやら呼んでほしいクソ野郎君よ？化け物の徘徊するこの世界で、御前の恩寵など当の昔に皆忘れていぞ。

ケイオスルーナーシリーズの世界軸。その遙か未来の話。

同じ設定を利用してはありますが、本編とは殆ど関係がございません。まったく問題なく新作としてみていただければ幸いです。世界設定としては、もしも地球がこんな事になったらのIF設定、さらにその何千年後。そんな感じ。異世界というほどではない。

あらすじ (前書き)

小説の説明…と言う訳ではなく。
定期的に変える予定のあらすじを保存していくコーナー。
別に誰得とか言わなくて良し。

あらすじ

書いてあった者を保存していくのが目的です。

あと、それぞれに突込みとか説明とかが入ったりもします。まったく読む必要はありませんので、サラッと次ぎにおすすみ下さい。

人を殺す。人が人を殺す。

思想で、理想で、主義で、主張で、希望で、欲望で、愛情で、憎悪で、信仰で、何かの理由で人が人を殺す。

狂気で、反射で、意思を捨て、命令で、金で、物で、特に意味もなく、特に価値もなく人が死ぬ。

それでも俺は復讐者としてここに立っている。復習をするため人を殺す。

どうか俺に果たさせてくれるな。その復讐を忘れることができるまで、その復讐の記憶から逃げる事が出来るまで、どうか俺から逃げ切ってくれ。

一番最初のあらすじですね、何でしょうこの漂う暗さと厨二感。

結構気に入っては居ます。一応、一番最初に書いただけあって結構正直なあらすじ、と言うかネタバレ感ありますね。と言っわけです。如何でも良いことですが、復讐の字を変換し忘れてます。何でしょう復習って(笑い)

龍理りゅうりと呼ばれる力を使う二人の男女。彼らが望むのは、それぞれの幸福。矜持と誇り。愛情と過去。憎しみと未来。

欲望と利害の渦巻く大都市イーデンホール。そこで繰り広げられ

るのは戦い。葛藤と感情の交差。学院の名の元に人種も関係なく集まった人、人、人。彼らを狙う人。彼らに縋る人。様々な人間模様の物語。

二回目です。

情報流出が微妙な感じ。自分としても書いた後すぐに後悔した文面と言いますか、何だこれ？

零章 かつて見た楽園（前書き）

痛みを知っていた僕に、痛みを忘れさせてくれたのも僕。

空回り、勝手に落ちてきた杭に貫かれて息絶える。その時の記憶が、僕から痛みを取り去っていく。

杭のかえしが、肉に食い込み、骨に掛かり、内臓を絡めとる。

段々消えていく痛みだけが、僕の記憶で、頭の中を埋め尽くす。痛みを失くした僕の存在は、痛みとその記憶だけ。

ゴールドーン・アリエミエルエウ「バルペルメルトンの狂騒」聖紀
1072年

零章 かつて見た楽園

俺の友人が殺された時、俺は始めて、悲しみが物理的な痛みを伴なうという事を知った。

友人：「だったのだろうか？少なくとも、俺にとって、当時は自分の事を僕と言っていたから、ついつい僕と当時の事を思い出すといってしまうが、あの人は大事な人間だった。」

恩人で。

唯一、俺を対等に扱ってくれて。

優しく、少し怖くて。

俺を友達と呼んでくれた。

お互いに名前呼び合い、お互いに尊敬し合おうと言ってくれた。

友達で、恩人で、師匠で、俺を色々な悪意から守ってくれた。

そんな彼の最後の光景に、反吐をぶちまけた俺に、復讐する権利も、悲しむ価値も有りはしないのではないかと不安になる。

そこにあっただのは一面の赤、それと、抜けるように切り抜かれた白、そして、古臭いブリキのバケツ。

当時、連日訪れ、時には自分の小物を隠し置いたりして喜んだ彼の部屋、あまりにも馴染みすぎていて、むしろ細かく思い出せないが、あれほど安心する場所は無かった。

肉と言う肉は表面で切裂かれ、綺麗に骨を露出させ、壁にポスターを張るように釘で打ち付けられていたその肉体は、首と指が無かった。

辺りに広がる咽るような血臭。あたり一面から目に刺さる赤色。外から聞こえてくる喧騒。横で気を失い倒れる幼子。果て無いほど白い骨。自分の脳底から沸き起こる絶叫。鈍い銀色のバケツと、貼り付けられた一枚の紙。

見慣れた部屋は赤と朱と紅に染まり、しかし、色以外は何の変化も無く。そして、その赤い部屋は今でも記憶に、鮮明に記憶の中で息づいている。

そして、目の前に、玄関から入ってすぐ近くに置かれたバケツの中には、その中には。

彼の頭と、十本の指。

口に、そして、耳に刺さり、鼻にめり込み、眼窩を埋め尽くす指。

昨日、笑って分かれた彼の顔は、奇妙な悪意と狂気の前衛芸術として、俺の目の前に在った。

俺の垂れ流す叫びに、水気を佩びた音が混じり。骨を伝わってくる異音と共に、俺は反吐をこぼした。

その後、気を失い自分の吐いた反吐の中に突っ伏した自分。それでも、彼に反吐を浴びせる事がなかったのは、あの惨状で唯一の、俺が持てた意思だったのか。あるいは偶然だったのか。

それとも、計算されつくして、上がり口からほんの僅か離れた場所に、彼の首を置いたのか。

わかる事は二つだけ。

一つは、俺の友人はつまらない主張のために殺された。

そして、俺はもう会えない彼の復讐を誓った。

零章 かつて見た楽園（後書き）

いきなりの殺人描写でしたがいかなものでしょう？

今後もこういった描写は入ってくる事が多くなると思いますので、苦手な方は気をつけてください。

近作は、一応ケイオスルーナーシリーズの時間軸上最も未来のお話になります。

IF地球世界の続きの続きの続きくらいの位置です。

しかしながら、まったくもって他の作品と絡んでいません。時間上は2000年くらい経ってますし。ですから安心してこの話だけ読んでくださればOKです。

それでは読んでくださいました方に感謝を。

どうかこれからもごひいきに。

一章 5・1 その世界の形（前書き）

歴史の授業でございます

一章 5・1 その世界の形

「国で一番の学校は？」そう尋ねられた時、帰ってくる答えは、国によって変わるだろう。それぞれの出身校によっても、また変化が起こるかもしれない。

では「世界で一番の学校は？」と聞かれたら。

これに関して言えば、百人のうち九十五人はこう応える。

イーデンホール

かつて、それは学び舎の名前だった。そして、その近隣の町や村には各々の名前があつたのだが、今では全て飲み込まれ一つの大きな都市の名前として認知されている。

そして、逆にその学び舎自体は土地の人間から名前と呼ばれなくなった。本校と呼べば分かるからだ。

都市としてのイーデンホール。学院としてのイーデンホール。

都市としてのイーデンホールでは、日夜変化が起こり続けており、今更小さな変化を幾つか上げていった所で埒が明かない。しかしながら、学院としてのイーデンホールでは、少しばかり変わったことが起きていた。

最年少の助教授が誕生したのだ、しかも同時期に二人。

では、まずはその片方の授業に目を向けてみよう。

「つまり、西暦と言うのは一旦ここで終わる事になる。人類が、と言ってもホモ・サピエンスだけでその言葉の意味が説明できる時期においての人類が、数々の穢れ物や竜、巨人や鬼、そして獅子神との争いに負けバベルと呼ばれた塔に逃げ込むまでの事だ。現在では旧文明期等と言われているな、今からおよそ2300年、正確に言えば2296年前の事だ」

太い首、太い腕、盛り上がった背筋と胸筋、子供の胴体ほども筋肉の付いた太い足。スーツを着込んでいなければ、何処の軍人さんですか？と尋ねたくなる、もしくは、何処のボディービル大会に出場されるんですか？だろうか。

筋骨隆々の大男と言う言葉を、これでもかとあらわしているその男は、ややくたびれた装丁の本を片手に教鞭を振っていた。

「その後、1200年ほど続いた塔の中の時代は、二人の人間の手で終結を見る。塔の時代、後バビロニア期の終焉は、西暦で言う所の3248年になるな。もしも現在も西暦が継続していたら、現在は4350年になるが、何で終わったはずの西暦を使っているかと言うとだ、後バビロニア期においては、九つあった各バベルにおいて別の暦が使われていたりしたので、便宜的に西暦を用いている。なじみのない暦かもは知れないが、学術的には良く使われるからな慣れておいたほうが良いぞ」

喋り続ける大男だったが、周囲の学生達の興味は薄い。ここは、世界最高峰の学院の高等科だ、そんな一般教養レベルの事は皆理解している。興味をなくし、内職などを机の下どころか堂々と机上で行

う者が出てくるのだって当然だろう。当然、大男の教師にだってそんな事は分かっている。

「この時に現れた二人の英雄が、賢智ファン・グーと竜との盟約口インホートだ。この二人を中心に、チーナ大陸バベルから始まったルコンキシユタと呼ばれる失地回復闘争、もしくは再征服運動は竜の領土まで来て、一旦の停滞を余儀なくされるわけだ。ちなみにこのルコンキシユタ、もしくはレコンキスタは、十字教徒が旧文明期の西暦718年から1492年まで行った宗教的征服運動から来た名前だ。絶対試験には出ないと思うが、まあ、雑学として覚えておいてもいいんじゃないか？」

軽い笑みを浮かべながら生徒のほうを見返すが、それで使徒からの注目が集まる物でもない。いかに前代未聞の24歳で助教授の職に就いた、それだけの能力が認められた者であっても、いきなり面白みのある授業などは任せてもらえない。専門知識や、彼の独自性などは生かせない一般教養。生徒からの評価が低いのは、彼の授業の腕ではなく、学院の定めた授業の要綱がその理由だろう。

「続きと行こう。ルコンキシユタを止めた竜の一族と、英雄率いる人間達は、当然のように争った。しかし、その争いの中で、竜が知性あるものだとして理解した彼らは、竜と人の間に盟約を結んだ。棲み分けが行われたわけだ、もっとも、いまだに問題は起こったりもしているわけだがな」

白板に、ペンが擦れる音だけが彼の言葉に彩を添える。もっとも、インクの切れかけたペンは心地よい音など鳴らせはしないのだが、他の音がない分だけ良く響いてはいた。つまらない授業とは言え、世界最高峰の学院の生徒達、騒いだり寝ていたりする事はない。ごく少数の例外を除いてではあるが、その少数も音を立ててはいなか

った。

「このときの盟約により、人は龍理ろんりを手に入れ、竜は機械技術を手に入れた。もっとも、竜のほうではあまり活用はしていないようだが、人のほうでの龍理ろんりの隆盛は皆知つての通りだ。さて、その後力を合わせた人と竜は巨人を壊滅させた。鬼は南極大陸にのみ現在存在するが、お互いに手を出し合つてはいない。獅子神は元から少なかった個体数がさらに減り、現在は竜の領土内で少数が生き残っている。かくして、現在の時代に続いていくわけだが、残っている問題も大きい」

大きな体に太い手足、鍛え上げられた肉体は、どう考えた所で威圧感を生むはずだが、教壇のすぐ前に座っている生徒が眠っているのは、やはり舐められているのだろうか？確かに、体とくれれば、やや女顔とすら言つても良い整った頭が首の上に座っている。もっとも、体のせいで美形とは中々思われないのだが、それも仕方が無いだろう。身体操作系の龍理ろんり使いは、常日頃から肉体にエネルギーを溜めておく必要がある。ごつくなるのは、やむなしだ。

「まず大きな問題は、各種の穢れ物が残っている事実。野生生物の変異体、妖怪や精霊、化け物達やその混血、僕しもへ、その他推類すら出ない物が多種多様に存在する。それらは、ほぼ例外なく人類の敵で、まず間違いないく私達に敵対してくる。不思議な事に、竜や獅子神に対しては殆ど攻撃を行わないが、その理由も不明。単純な強さゆえではないようだ、なぜならば穢れ物と鬼は明確に敵対している。人型であることが問題なのかとも考えられているが、穢れ物の中にも人型は多く存在する。先ほど言った鬼、魚人や獣人、忌子や悪魔系と呼ばれる穢れ物の中には、殆ど人間と変わらない姿の物達もいる。そこに生じる差異が何なのか？なぜ起こるのか？それは解明されていかない」

そう言いながら男は教室を見る。同時に彼は、胸に刺さるような痛みも覚える。獣人や鬼の血を引く人間もいるし、彼ら以外にも純血の鬼や獣人が人の生活に入っている事もある。彼らの多くは確かに人を害するが、何事にも例外があるのだが、そう思いながら胸の痛みを実感する。そして、教科書には書かれていない文章をつなげる。

「しかし、彼らの中にも人との共存を望む者がいないわけではない。しかし、残念ながらその思いを踏みにじっているのは人間だ。彼らの希望する共存や、思い描く和平への道を潰している者達が人間の中に多くいるのも事実だ。その事をちゃんと考え、異種族同士、もしくは異人種同士が手を取り合えるよう、そういった世界を作っていくことが、幸運にも教育の中に身をおける私達の義務だろう。君達がここに居られるのは、君達の能力の結果であり、またその金銭は親やくにによって賄われている者も多いだろう。しかし、それ以上世界の中に存在が許されているからこそその現在、そのことを忘れず、世界に対して何が出来るのか考えてみる事がよいだろう」

その時、機械的に合成されたチャイムがなり、ガヤガヤと音を立てながら生徒達が教室を出て行く。

その中には、エマン人やコーバルン人などの姿も見える。他の地域では迫害される事もある彼らだが、ここイーデンホールでは問題なく生活が出来る。その事の少しだけ先にある事も考えて欲しいと思いつつ、男は太い指で教科書をたたんだ。

そして、白板を綺麗に拭くと、身を折りたたむ様にして教室から出て行った。

教壇の前に座っている少年は、いまだに寝息を立てていたが。

一章 5 - 2 その世界の力

もう一人の助教授、それは見目麗しい女性だった。

「龍理ろんりの基礎は、無論言うまでもないことだが竜子りゅうしと咒素すそを認識する事になる。この二つは基本的に同じ物ではある、前者の竜子りゅうしはアリエオネオン学派、後者の咒素すそはギエラームント学派の付けた名前だ。私は個人的な好みで今後、竜子りゅうしに統一して話すが、問題として出された物にはどちらで答えてもかまわない。そのことを覚えておいてくれ」

こちらも、つまらない授業には変わらないのだが、女性でさえも見惚れる様な美しく怜悧な女性が教壇に立っている為、だれた感じは一切ない。美女は徳というしかない光景だろうが、彼女も24歳で助教授になったのは純粹に能力ゆえだ。その美貌が、まったく影響を与えていないという事はないのかもしれないが。

「なぜ、私が竜子りゅうしと言うアリエオネオン学派の言葉を使って説明するのを好むかと言うと、竜子りゅうしの性質を説明するのに向いていると思っからだ。けして私自身がアリエオネオン学派の考え方に染まっているわけではない。盲信や執着は学問をする原動力にはなるかもしれないが、そこから得られる発展は少ないと考える。その事は、各々肝に銘じて欲しい」

長くしなやかな黒髪は、濡れたように美しく光を受け止め、黒い光を放っているようで神々しさすら覚える。褐色の肌は触れれば吸い付きそう、そのきめの細やかさ、触れたときの感触を想像しただけで、背筋に火が走る。しなやかな長身、大きすぎない胸と自然に

絞り込まれたウエスト。どこか凜々しさを感ぜさせる男らしさと、溢れる様な色気を同時に発散させるハンサムな美女。相反する特性を一片も欠けることなく兼ね備えた彼女は、神の作り出した芸術品とすら周囲に思わせる魅力を放っていた。

「陰竜子と陽竜子、聞いてそのまま、マイナスの要素を持った竜子とプラスの要素を持った竜子、どちらが有効でも上位でも下位でもない。ギエラームント学派の正と負の咒素と言いつ言いは誤解を招きかねない上に、実際にあの学派では正の咒素、つまり陽竜子を重視している。その部分は、訂正が入るべきだと私は考えている。そう言った事を踏まえて私は竜子の方を使っていくので心得ておくように」

熾烈な争奪戦で教壇前の席を確保した生徒は、顔面の骨が砕けているのではないかと言うくらい表情を緩ませ、教壇に立つ彼女を見ている。勉強になってはいないのかもしれないが、彼らは幸せそうだが後ろの方には、双眼鏡を目にあてている連中もいる。さながらアイドルの追っかけのようだが、彼らはこれでも世界的に見てもエリート集団、であるはずだ。

「竜子はそれ自体が物質に左右するものではあるが、物質そのものではない。擬似物質、もしくは物質管理存在と認識されている。学派によつては、世界構成のマップ、現象の調整因子、あるいは宗教的に神の力、奇跡の権現等ともされる。トトメスク学派では、つまりは北方十字教においては天使の羽などとも言つな、実にロマンチックな言い方だが。ここで言いたいのは、龍理は竜子を変化させ、管理し、調整する事によつて様々な現象を引き起こす。しかし、竜子自体がつまり、龍理とは物質を直接扱う技術ではないという事だ。これを認識するかどうかは大きいぞ。龍理とは、古の魔法使いの使用物ではない、確固たる技術体系の中の技術であり、物理法則に

原則として従うものだ」

長い髪をなびかせながらクルリと後ろを向き、板書を始める。男女を問わず、その背面の艶かしさと腰から臀部にかけてのラインに見惚れ、恍惚とし、前方に座っていた生徒の中には、鼻を押さえながら診続けているものもいる。彼女の周囲では良く起こる現象といえる。

「物理法則に従う以上、その物質の構成は素粒子によって賄われるのは自明の理。物質そのものを攻勢する源粒子、かつてはフェルミ粒子と呼ばれたものと、力を媒介する力粒子、こちらはかつてボース粒子と呼ばれたものの二種類がある。まあ、本当はもっと細かく分けることも出来るのだがな、これ以上は専門になるのでそこでだ。さて、竜子は、その二種類の素粒子の管理を、 180 の 10 の 69 乗倍。式で表すならば $(5 \times 6 \times 6) 10$ の 69 乗の数值に等しい組み合わせで管理する。当然のように膨大な数字で、これを全て覚える、理解する、などと言うことはどんな天才にも不可能だ。歴史に名を残したような偉大な龍理^{ろんり}使いであつてもそれは変わらない。意識拡大の龍理^{ろんり}や、機械化による脳の拡張、外部記憶の補佐などを万全に使つたところで人間には不可能な数字だ。そこで、人間は、いや正確には竜は裏技を使う事になる。物質^{ぶつしつ}≡竜子^{りゅうし}同調法だ」

振り返り視線を教室に撒けば、熱狂的なファンの集団の中から視線のあつた者が次々と顔を赤らめ、興奮のため息は荒くなり、中にはそのまま気を失うものさえ出た。世界的なアイドルやモデルでもこゝうは行かないだろうが、本人は自分の魅力にやや懐疑的だ。その辺りの事はある人物とのことが影響している。

「かつては、その同調を予め計算して置いたものを脳内で展開する事によって発揮していたが、これには問題がある。結局の所脳内で

の管理では人間の能力上限界が訪れるのは致し方ないことだ。個人が使える龍理ろんりの数は勿論、規模も小さなものに落ち着くしかなかった。この問題を大きく改善したのが、エゼキエル博士の開発した龍理情報系管理物質事象統合計算宝珠、通称龍珠りゅうじゆ。この龍珠りゅうじゆの開発により、感覚的には意識せずに物質を直接操るように、龍理ろんりの展開が行えるようになった。しかし、龍珠りゅうじゆはあくまでも私達を補佐するものだという事を忘れてはいけない。良い龍珠質の高い龍珠りゅうじゆを持てば、確かに龍理ろんりの質も上がる、それは事実だが、それ以上に重要なのは自身でいかに事象を把握し龍珠りゅうじゆの演算を活用するかだ。自身の能力が結局のところは差になるという事を十分に理解して欲しい」

目の前で、ただ顔を紅くしながら壊れた仕掛人形オートマタのように首を振り続ける生徒達にため息を漏らしながら、彼女は教科書を閉じた。

「次回は、実際に竜子りゅうしと源粒子・力粒子がどう言った計算方式で結びつくのか、また、その問題は何かと言う所に入る。学生番号220番から230番」

番号を呼ばれた生徒は、託宣を得た信徒のように希望を顔に溢れさせ次の言葉を待つ。いやはや、狂信者の集まりである事に間違いはない。もっとも、教祖たる女性はもしくは、彼らにとっての神に当る彼女は、その状況にため息を漏らしているのだが。

「先ほど言った授業内容に沿って、代表的な龍理ろんりの計算方程を幾つか書いてきなさい。それでは、本日の授業は終了」

言い終わった瞬間、合成されたチャームが流れ、そのまま彼女は疾風のように教室から消えた。一瞬でも遅れると、生徒に取り囲まれて教室から出ることが困難になるからだ。過去に経験している苦い記憶を振り払うように彼女はそのまま廊下を研究室へ急いだ。

幾ら彼女にとっての優先順位が低いとは言え、助教授職にある者が生徒を蹴り飛ばしながら教室から出るわけにもいかない。

生徒達の意味とは裏腹に、彼女の中での生徒達の優先順位は日に日に下がっている。

一章 5・2 その世界の力（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。

もうしばらくは、早めの更新を続けようかと思えます。

一章 5・3 その世界の差

「中々ではある」

「厳しいね。かなり手は込んでるよ、食材だって値段にしては吟味してる」

「値段から見ればでしかないとも言える」

「厳しいね」

先ほどまで教壇に立っていた助教授二人は、とあるレストランのオープンテラスに居た。最初のほうが女性、後のほうが男だ、二人とも中々食事には厳しい。

イーデンホールのゾロテ地区。カラデニズ海を臨む高級と言うほどではないが品の良い店の立ち並ぶ地区に二人は居た。カラデニズ海かつて黒い海と呼ばれた内海から吹き込んでくる風が心地よい。辺りに座っている客も上品な老夫婦や一人で来ている淑女、少し背伸びした学生カップルが微笑ましい。彼らはあまり評価していないが、決してランクの低い店ではない。

「もう少しゆっくりとしたかったのは残念だね」

「別に構わないわ。この後はあなたと家で、と言うのはどうかしら？」

妖艶に微笑む美女に、他の男から見れば殺意を持ってしまっほほど悠然と、大男は飲んでいたコーヒーのカップをソーサーに置きながら

首を横に振る。

「残念だが」

「私は本心から残念よ。ガンジユ」

少し拗ねた様に頬を膨らませながらですら、天上の美姫の様に威厳と品を失わない彼女も、一拍遅れてカップを置いた。

ガンジユと呼ばれた男の首に、一本の光の糸がまとわりつく。冷間引抜炭素鋼線、通称ピアノ線と称されるその細い糸は、1ミリマルト以下の細さであっても、1200キログラムの張力を発揮できる。その、細くしなやかな鋼の糸は、ガンジユの首に紅い花を咲かせようと、その径を狭めようとしていた。

「絞首張線チエルバル斬の龍理ろんりか。東方の忍とやらがよく使うと聞いてはいたが、遅いな」

「どうせ、あつちで負けて落ち延びた落伍者でしょ。食い詰めて主義に身を売ったら奴らだもの」

先ほどまで注文をとっていたウエイターと、ガンジユを挟んで対角線に居た女性の指先から、輝く糸が伸びている。その伸びた糸が交差した場所、その基点をガンジユの指が押さえている。糸のように細く、刃のように鋭い鋼を指二本で完全に押さえ込むのに、どれほどの力が必要なのだろう。ただでさえ、二人がかりで引き絞っている鋼線なのだ。

その時、授業を受けていた学生なら大きな違和感を感じただろう。あるいは、その違和感の正体に気圧され身動きすら出来なくなつて

いたかもしれない。

スーツに包まれた肉体から、喻えようもない威圧感、圧迫感それが何処から来るのか。教壇に立っていたときには抑えていた野獣の本能、肉食獣の威圧感、一瞬で命を摘み取る事が出来る者に特有の、生命的な根源からの恐怖。それらを開放したガンジユは、今、先ほどまでとは別の気配を纏って辺りを圧していた。

そんな姿をにこやかに見ながら、彼女の方は顔を赤らめている。その鋼線を引き絞る二人の顔面は蒼白、指には震え、体中に冷たい汗をかいている。捕食される草食動物、それよりもさらに一方的な、ただ遊ばれ手の中で転がされる小動物、その感覚を今まさに彼らは味わっていた。

そのまま空気ごと世界が固まるかのような精神的重圧の中で、絞首^{チエ}張線^ル斬を放っている二人は身動きが取れなくなっている。

その状況を突破しようと、辺りに座っていた淑女と老夫婦、そして年若いカップルが一斉に立ち上がり、龍理^{ろんり}を紡ぐ。彼らの目には、先ほどまでの穏やかな空気、品の良い姿は無い。恐怖と責任、絶望と焦燥、それでも訓練を受けた彼らの行動は起こってしまう。半ば反射的に、あるいは恐怖から逃れるように。

紡がれた龍理^{ろんり}は、六方飛劍擲^{ロクムヒ}。一人辺り4から7の手裏剣が、あたりを埋め尽くすように回転しながら飛び込んでくる。

「アリ、殺すなよ」

その光景に、やや不機嫌そうにガンジユが忠告する。その言葉を受けたアリと言われた彼女も、同じく不機嫌に首を縦に振った。

「分かってるわよ。まあ、めんどくさい！」

ア리가叫んだ瞬間、彼女の周りに三角錐型の黒い壁が現れる。特殊炭素繊維とケプラーの7重装甲の上に、炭素の結晶が張り巡らされた黒く光る壁。防弾防刃対衝撃、さらにその角度が攻撃を逸らせ無力化する。黒檻樓金守塔グラミットの龍理ろんりにア리가包まれると、ガンジユの指が高く鳴った。

指先には、白く光る物質と切れた鋼線。煌めいたのは晶卦断裂爪牙フウクラウの龍理ろんり。

立方晶窒化炭素りつほうしゅうちゅうつかたんそ、ダイヤモンドよりも高い引掻き強度を持つ現在人類の知りうる限り最も高硬度な物質の一つ。それを指先に生成したガンジユは、最高硬度の爪を持って絞首張線斬チエルバルの鋼線を切裂いた。そのままの勢いで、自分に飛んでくる手裏剣をなんとも無い様に指で挟んで止める。

そして、ガンジユが全ての手裏剣を止めた時、全ての敵はすでに沈黙していた。

ア리가黒檻樓金守塔グラミットの中から紡いだ龍理ろんり、六条フレスリオ？牢ラウの作った霰石、結晶状の石灰石が敵の体を覆っている。硬度も重量も、一流といわれるような龍理ろんり使いには足止めにはかならないようなものではない。あるが、見た目の美しさから彼女は好んでこれを使う。あくまで、対象が格下の時だけだが。

あるいは、せめてもの美しい光景に何かの救いを求めているのだろうか。教壇に立つ時、そして戦いの時、彼女には感じられなかった弱さが、戦いが終わった今は感じられる。もつとも、それを感じら

れるのも長い時を過ごしてきたガンジユくらいなものだろうが。

「食う為に人を殺す…か」

その弱さが分かっているながら、思わず口から嘆きがこぼれる。彼らは敵と言う事に間違いは無い、しかし、彼らは復讐の対象ではないし、その思想もガンジユたちの憎むものではない。むしろ、同じような考えを持ちながら生活の為に敵対者となっている。その悲しみと葛藤。

「人の事は言えないけどね」

業と皮肉げに言うアリの易しさに、それでもどこか暗い顔でガンジユは頷く。

「ああ、言えやしないけどな」

一章 5 - 4 その世界の歪

晶卦^{フロッグクラウ}断裂爪牙の爪を使って、六条^{プレシリオ}？牢^オの牢を死角から削っていく。所詮は硬度4の霰石、硬度10を越している立方晶窒化炭素の爪の前では見る間に削れて行く。

死角から自分を守る檻の削れる音、先ほど見せた圧倒的な戦闘力の差、無表情に見つめる二人の視線、周囲に広く展開した黒檻^{グラミツ}樓金守塔の中という狭い空間。それら全ての複合した恐怖は、すでに訓練された忍の精神を限界に追いやっていた。

人間は拷問に耐え切れない。洗脳に耐え切れない。恐怖に、そして重圧に耐え切れない。ごく一部の例外は存在するかもしれない、他の者よりも耐久力が高い者も居るだろう、生まれつきに、そして訓練で、そこに差は出来る。しかし、究極的に永遠に最後まで耐え切れる者は居ない。

だからこそ、忍や特殊な訓練を受けた者達は、対処法を実行に移すのだ。死に逃れると言う対処法を。

しかし、それすらも許されない牢の中、自裁の為の毒薬は口中から取り除かれ、指1本動かす事もできはしない。ただただ、受身になるだけの状況で、その無力感もが囚われた忍の心を苛む。

「殺せ…殺せえええ！」

もがき、全身の力を使って逃げるために行動を起こすが、厚く固められた石は彼の自由を奪ったまま僅かに震えるだけだった。

「殺してくれ。何も出来ないのなら、せめて、せめて」

しわだらけの顔を歪め、涙を流しながら泣くのは髪の毛の白くなった老人。老夫婦の片側、好々爺の役を担っていたのは、化粧も何も施していない、実際の老人だった。いや、あるいは本当に夫婦の間柄なのかもしれない、ガンジユにもアリにも、今気絶しているその老婆にそれを尋ねる気も、涙を流す老人にそれを問う気も無い。

老い、病、障害、後遺症、その理由が何であれ、運不運の差があれば、万人に訪れる物、不幸に見舞われた者、しかし、弱者と言う共通項を持っていた。

東方から落ち延びた者達、居場所を奪われ生活の基盤をなくし、人々の集まる大都市にようやくの思いでたどり着いた彼ら弱者は、場所に関わり無く弱者である事に変わりは無かった。

資産や資格を持っていない彼らは、使い潰すのに最適だった。悪意を持って迫ってくる者達から身を守るため、さらに大きな悪の元に身を寄せるしかない、しかし、使い潰されるのはそこでも変わらない。

せめて生き延びるため。

せめて、不幸ではない死を迎えるため。

そのために、彼ら弱者はせっかく守った命を再び死地に向けた。

誇りをなくし、逃げ延びて、仲間の下を離れ、故郷から遠く離れ、そこまでして守った命を新天地として望んだ場所で死地に晒す。そ

んな彼らが、一縷の望みを託して向かった相手は、圧倒的な力量差を持つ二人だった。

「ヒサザキの国からの逃亡者か、あるいはコウヤの国か。いずれにしろ、逃げた先にそれ以上の栄光が待っている事は少ない」

「かつて英雄を出した土地、かつて世界で一番美しいと言われた土地。その土地ですら、このような者達をこの街に生み出す。悲しいとしか言いようが無いわね」

かつて、最も大きく、最も高い技術と強力な指導者を持っていた塔チーナのバベルから生み出された国。そこが世界の主導国だったと言ったら、今生きている者達はそれを信じるだろうか？死つてはいらるだろうが、どうでも良い話としか思わないだろう。

世界に1000年続く政権はない。国は生き残ったかもしれない、文化も続いていくだろう、家名が残ることもある。しかし、確固たる政権が長期にわたる事の少なさは、歴史を学んだ事のある者の共通認識だろう。かつての主導国、現在は分割し分裂し、互いに争う争乱の国々。旧国名ヤーパーン、今幾つの国に分かれているのか、住んでいる者達でも正確な数は知っていないだろう。

東方は荒れに荒れている。いや、世界中で荒れていない所など無いだろう。その世界が辛うじて均衡と安定を保っているのは、竜と言う強大な隣人と穢れ者達の脅威、そして未だに増え悩む総人口があつてのことだろう。

世界は決して優しくない。特に、弱者に対してより多い枷と傷を強いるのが常になっている。すでに世界が穢れ物に覆われ、人類の生存圏が著しく縮退された時、神を信じていた者達の多くはその思想

を捨てた。物が溢れ人が溢れ、學術と飽食の街イーデンホールにおいて、辛うじて生き残る前時代からの宗教も決して強い力は持つてはいない。しかし、溢れる弱者の怨念と怒りは新たな権力と思想を作り、彼ら自身を強者としてしまった。

弱者は少数ではやはり弱者のまま、しかし弱者が一定の数に膨れ上がり、強固な結束を持った時、彼らは襲い掛かり飲み込む悪意の波となる。彼ら弱者が、後に続く弱者を救済するならば、世界はきっと幸福だろう、しかし現実はそうではない。過去弱者だったものこそが、より激しく後に続く弱者を虐げ、絞りつくす者になる。

「聞きたい事は二つ。誰が依頼したのか？人質は居るのか」

静かに尋ねるガンジユの問いに、未だ涙を流し続ける老人は、何の事かわからないと言う顔をする。その反応を見越していたのか、ガンジユは再び同じ事を繰り返す、その後ろでアリはため息混じりに六条？プレシリオ牢の龍理ろんりを解き始めた。

石牢の消えていく中老人が答えたのは、仲介者から話を受けただけでその元は分からない事、共に逃げ出してきた仲間たちからも置き去りにされた彼らには、人質になる者も重要な物も無い事。

「そうか」

安心したように目を閉じるガンジユの腰で龍珠りゅうしゆが僅かに震える。とは言え、未だケースに包まれたままなので他の者から見える事は無いのだが、その振動は龍理ろんりが発動する証。彼の紡いだ楽眠せふいの龍理ろんりは、脳内のGABA作動神経系に働き各種興奮ホルモンを抑制、さらにメラトニンとベンゾジアゼピンを生成し睡眠へといざなう、不安を一瞬忘れさせ心地よい睡眠の中へ。

「後でラデックに来て貰おう。後見人に俺の名前があれば、保護区の居住権か、少なくとも生活支援対象者にはなれるだろう」

「きりが無いのは分かっているでしょう？何時も聞く事だけど」

「その為に、如何でも良いような授業をしながらでも助教授の職にあるんだ。せいぜい有効活用するさ」

その基礎が学院から成り立っているイーデンホールでは、本校の職員と言うのはそれなりに特権扱いをされる。彼らはたかが助教授では在るが、そうであっても役所などに対しての発言権はそれなりに高い、不動産や証券の購入などに関しても幾分かの利点があり、エリートとして扱われる立場なのだ。もっとも、彼ら以外の職員にとつては、借金の時有利だとか結婚の時に好条件と思われるくらいの事ではないが。

事件の多いイーデンホールで、出勤の遅い警察特殊車両がようやくサイレンを鳴らして到着した。不幸にも力の発露の現場になったテラスでは唯一無関係の客が腰をぬかしている。そして、レストランの中では対処に困ったオーナーらしき人物が顔を真っ赤にして、その怒りを何処に向けてよいのかわからないまま足を強く踏み鳴らしている。

「後はどうやって誤魔化すかだな」

「私はそこまで面倒を見ないわよ。先に帰っているから、あなたも早く帰ってきなさいね」

そう言い放つと塵気楼のように姿を消したアリの気配が消えていく

のを感じ、ガンジユはため息を漏らした。

その時、防護服に身を包んだ警官が、植木鉢を倒しながらテラスに突入してきた。

一章 5・5 その世界の闇

薄暗い部屋、天上に開けられた一つの窓から差し込むつきの光が、切り取るように部屋の中を照らし出していた。

広いシーツの海には、動かぬ裸体と動けぬ裸体、荒く息をつき目の焦点のあわない裸の女達。彼らの中には、肌に鱗のある者、耳の形が違う者、極端に身長の高い者、肌の色が蒼い者、一般的なホモ・サピエンスではない者達が多く見受けられる。

「こんな出来損ないとして楽しいのかい？正気を疑ってしまう僕を許してくれるよね」

壁にかけられた長距離電通、言ってしまうえばテレビ電話なのだが、ここに備え付けられていた物は少し様子が違った。その重厚感と装飾の絢爛さ、そして何よりも今時立体映像ではなく平面の映像が映し出されている。

「穢れた物とする自分の浅ましさに背筋が震えるだろう？」

「被虐趣味って奴かい？僕にはあまり理解できないね、いたぶって楽しむと言うのなら若干の理解はするよ。むしろ、熱く語り合っても良いくらいさ」

逆光でなおさら肌の白さを増したその映像は、その目だけが黒くそして確かに残酷な笑みの形に歪んでいた。

「私が用の済んだごみを片付けない訳が無いだろう？後は、そうだ

な、お前の言うように虐げてもいいだろう。ただ、私は薬によって精神が崩壊していく様を見るほうが好みにあっているが」

広いシーツの海の中央に座る男は、微笑みながら答えた。

その下には、恐怖で顔を蒼くした女と、薬によつてただ快樂だけを追い求める女。陰茎に跨った女は口元を歡喜と悅樂の笑みに変えながら上下に動き、奉仕を強要された女は、その恐怖に体をこわばらせながらも一瞬でも生の時間を長くするために彼に舌を這わせる。周囲で相克し、相反する二つの感情が、男の嗜虐心と官能を高めていた。

「いい趣味だね。皮肉じゃないよ、君にだけは勘違いして欲しくない。いろんな人に言われるんだけど、僕はどうも誤解されやすいらしくってね」

「そうだろう、そんなお前も私は好きだがね。安心するといい、何なら何個か用意しようか？それともゴミになるだけかな」

ビクリと震えを起こし、一瞬奉仕が止まった女の顔に、男の指がめり込む。柔らかな果物を握り潰すように、何の抵抗も無く肉と骨が抉れて行く。

「ああ、またゴミができてしまった。いや、元々ゴミだからこれはなんとはいえいいのか？お前なら分かるかな」

「さあね、でも、そんなゴミのために何かを考えるなんて君は優しいね。そんな優しい優しい君は、難民の救済活動でも始めたのかな？」

グシャリ、グシャリと肉と骨の潰れる音が鳴る。

女達は、すでに失った正気の中で蛇に睨まれたかえるのように吞まれて動かない、動けない。

「お前の言葉はやはり皮肉だよ。しかし、だからこそ私は楽しい、ああ、あああ、あ、ああ、ああ、大好きだよ。そう、お前のような者がいなくては、私のような者は楽しみが無い。ああ、あああ、素晴らしい、家庭も何もかもは如何でもイイよ、お前の言葉だけでイイ」

「あはははははあは、僕の事を嫌っているのにそれが楽しいんだね、嬉しいんだね、悦びなんだね。僕たちは本当に良いパートナーだよ、彼と彼女に負けないコンビさ。これから、君の失敗をなじるよ、彼らの葛藤に悦びを覚えるよ、ああああ、何て、何て面白いおもちゃたち。屑やゴミやガラクタばかりの世界なのに、それを使うとこんなに楽しい。さあ、次は如何するの？早くしてくれないと僕は自分で動いてしまうよ」

裏返った声の余韻を残して映像が途切れる、足元に血だまりを作った男は、朱に染まったシーツを身に纏い月を眺めた。

「勿論さ、お互いの悦楽のために彼らに行動を起こさせよう。かつてまいた種は予想以上に育ってくれた、なんと素晴らしいんだ、予想をはるかに超えた玩具だ、あの時の私を褒めてやりたい」

月明かりに紅い反射を添えて、その哄笑は高い空へと昇っていく。

あえて狂気を演じる必要など、とうの昔に失くしてしまった。

それならば正気を演じよう、
せめて彼らに痛みを忘れさせないため
に。

復讐者にすらなれない者に。

二章 7-1 その社会と男

「で、今回の屁理屈は何だ？」

「何が良いと考えているのか教えてくれれば、その通りに答えるぞ」
非常に不機嫌な声と不機嫌な声が変わされる、もつとも、警察署内においてご機嫌な声等と言った物が早々聞かれるものではないだろうが。

「あのな、ガンジユ。この街では十九秒に一回犯罪が起こりやがる。分かっていて事件になった物だけでだ」

「そうですね、実数を計測したら0.5秒に一回くらい起きてるんじゃないでしょうか？皆さん活発だから。しかし、去年は二十秒に一回と聞いていましたが…悪化？」

「何を白々しく言つとるんじゃない！この頭も体もでつかちは！なあ、歴史教師よ、社会情勢はお前の専攻だろうが、本校の先生よ」

薄くはなっているが、黒髪黒目に明らかな黄色人種の肌、大陸顔とも言える明らかな旧来よりのアイシヤア人種の男は、こめかみに血管浮かせてにじり寄る。人種の交わり、変化が起こり、遺伝子的に長い間いじられ続けた今の人類としては珍しい、純血に近い系統を保っている珍例だ。ついでに言えば、遺伝子改良で消すことも出来るハゲの遺伝子まできっちり保持している、ある意味天然記念物だ。

「まったく、人の部下を好き勝手に使いやがって。何だラデックの報告は、爺さんが転んで七人巻き込んだあ？それを助けるためにと

つさに龍理りゅうりを使ったあ？そこまでならまだ分かるがな。な、ん、で、途中からテラスとの仕切りガラスに反射膜が張ってあって外が見えないなんて事になるんだ？他の所からの視点じゃあ、普通ならありえないような大型の防御龍理ぼうぎょりゅうりが展開されてたそうだな。と言うか、アレキサンドラは何処に行った！お前たち二人が別行動なんて、本校内以外ではありえんだろぅが！いい加減、警察を馬鹿にしてないか？」

喋りながら、段々と鬱憤が漏れ出て来た様で、加速度的に肌の赤みを増やしながらくし立てていく。この時、相對しているガンジユの感想は、ああ、疲れてるんだね、だった。彼としても、悪気があるわけではないのだが、仕事を増やしたのは事実だし、これに関して言えば、まじりつけ無い純粹な同情だ。

ちなみに、遮蔽幕を張ったのはアリだ。理由としては、単純に店内からの視線が気に入らなかつたのだろぅ。キラキラ光る幕なんて、かえって目立ってしまうのだが、一応視線は遮ることが出来る。

「アリなら家に帰っていると思いますよ。授業で使う教材を作らなくちゃならないとか言っていましたから、呼び出しますか？確かに一緒に居ましたが」

そう言えば言ったで、呼ばれたら呼ばれたで彼も困るのだ。アリの言葉は鋭く、またガンジユ以外に対しては優しさか思いやりを表面に出さない。精神的に圧迫を受けるので、彼の残り少ない黒髪を減らし、胃薬の消費量を上げることになるだろぅ。

「いや、良い。まあ、事件にしてもらわない方がこつちとしても助かるがな、それならそれでもっと上手くやれ。目立ちすぎだ」

「東方では相変わらず紛争と混乱、南方では砂漠化に歯止めがかからず飢餓と貧困、北では穢れ物が増量中、果てさて西は？」

「西は竜の生存圏だ。俺にまで授業のつもりか、このへボ教師」

「これで、ここが平和なら地上に残されたオアシスなんですがね。あいにくと犯罪件数はうなぎのぼり、警察だけでは手に追えず、そこで私達の様な委託の賞金稼ぎの出番があるわけで。いや、感謝してるんですよ、高額の賞金首をよく斡旋してもらいますし」

ガンジユは、コーヒーを一口啜ると無表情になってそのままコーヒーを置いた。ただでさえ不味い警察のコーヒーは、冷えて生ぬるくなった結果飲めたものではなくなっていた。合成コーヒーにしたって、もつとマシな物があるはずだが、何でこんな物を正式に採用して飲んでいいのか理解が出来ない。癒着の問題でも在るのか？あるいは舌が死んでいるのか？そんな物でも警察官は皆平気で飲んでるので、後者のような気がするが。

「お前らのように腕の立つて、なおかつ警察からの依頼を真面目に聞いてくれるような龍理ろんり使いは希少だ。大概はチンピラか、その崩れたのか、あるいは変人だ。上のほうも、お前らには便宜を図るように言っている、だからこそ、目立たなくやれ、上手に、地味に、こそこそと。市民の目には良い本校の先生の仮面を被り続ける」

「随分な言い様ですな、部長。ストレス溜まってます？」

「聞かんでも分かるだろ」

「ですな」

そう言つてガンジユは椅子を離れると、応接室から出て行つた。ところが、もう一度顔だけを出し、

「ああ、下の娘さんも御結婚なさるそうで、私も誘われていますので次はそちらでお会いしましょう」

と言つて、顔を引つ込めた。

その直後、応接室の中からは応接セットを叩き壊すような音が聞こえてきたが、誰も見ていないので事實は定かではない。ちなみに、後日部長が自費で応接セットを新調したようだ、理由についてはみすばらしいからだったが、眞実は如何であろう。

世のお父さんのご多聞に漏れず、このイーデンホール警察本署、総務部部长、チュン・ゴール氏も娘を愛するお父さんであつた。その他、特徴を挙げるとすると、彼の二人の娘は美人で有名で、さらにはお父さんにも愛想の良いとてもよく出来た娘さんたちだつた。そして、よく出来た娘さんならではのスピードで、これまたよく出来たお嬢さんを貰い、結婚と言つ事になる。上の娘は婿をとり、同居しているが、これが目に入れても痛くない娘のラブラブ生活（死語）を見せ付けられる事になり、下の娘は今度嫁に行く。

もう、お父さんストレス大爆発状態だつた。

ちなみに、何でハゲなのに美人の娘さんやら、さらに美人の奥さんやらがいるのかと言う所では、少し面白い傾向が見て取れる。遺伝的にそう言つた性質は無くせるのだが、かえつてそれを保っている純血の血統のほつが、もてはやされたりもするのである。この辺りに人間の不思議であるよねと、歴史を学びながらガンジユなどと思つたりもするが、チュン部長からしてみれば美人の嫁さん貰つて

大満足の結果でしかあるまい。大抵の人間は、目の前の幸せの理由を深く考えたりはしないし、そのほうが幸せだったりするのだ。

さて、少しばかり皮肉に対する仕返しをしたガンジユは、警察署の中を歩く。

「ガンジユさん」

そう、呼び止められてガンジユは足を止めた。

「ああ、ラデックか。また世話になってしまった。部長の怒りはお前には行かないだろうが、もう少し待ったほうがいい」

「でしょうね。娘さんがまさか十代も早いうちに両方とも嫁ぐとは、少し可哀相かもしれませぬね」

「お互いに、妻も居なければ子も居ないんだ、結局の所は判らねえんだらうがな」

そう言うと、ラデックは笑いながら答えた。

「あなたとアレキサンドラさんの間に子供が生まれても、ああはならないと思いますが。そうなった時は大いに笑わせてもらいますよ」

その問いに対しては、ガンジユは感情をわざと消した無表情で相對する。人が見れば、仮面のようなとても思っのたろうか、あるいは死人のようなたろうか。

「それは無いんじゃないかな？」

「いい加減、私達のアイドルを幸せにしてあげて欲しいのですがね。あの人が折れる事はないでしょう、だから問題はあなただけですよ、ねえ？違いますか」

ラデックの声に攻めるところは無い。ただ、少しばかり悲しそうにしてはいる。そして、もつと小さく笑っているのかもしれない、ガンジユへの嘲笑ではないが、自嘲の意味が無いとは言えない。

「互いに、早く幸せになりたいものですね。ねえ、ガンジユさん」

「あまり、考えたく…いや、考えられないな、実際」

お互いに過去を多少は知っている者同士、言える事も言えない事も、そして言ってしまった事もたくさん在る。しかし、言えないからこそそれは大量に積みあがっているのだ。そして、だからこそ二人の関係は良好といえる。

「貴方の後輩になって学んだ事で、出世が早くなりそうですよ」

「そのうち、俺たちを顎で使ってくれ」

その時は、お互いに幸せであれば良いが。

そう思えば、お互いに浮かぶのは自嘲の笑みだ。さわやかではあれ、どこか乾いた笑みは、この二人に共通する。似た者同士だからこそ、だからこそ辛い事も触れえぬ事もあるのだが。

二章 7・1 その社会と男（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

今後は、週に2回ないし3回くらいのペースで行けたら良いなどが
夢想中でございます。
如何かよろしく。

二章 7・2 その社会と女

薄暮れの夕方を歩く女性。彼女をニュースで報道するのなら、アナウンサーの言う言葉はこうだろうか、

ジャーミー・マッケーン（27歳）サービス業の女性

もしかしたら、サービス業の所は風俗業というかもしれない。言っ
てしまえば、彼女の職業は出張娼婦、電話で呼び出され春を売り、
一夜の恋人か90分の恋人になってくれる女性。

ジャーミーは、今日嫌な客に当って小石を蹴りながら家に帰ろうと
歩いていた。基本的にフリーで活動する彼女は、何処かの店に居る
わけではない、ただしフリーの女が勝手に店を^{たな}広げて良い商売では
ないし、それでは客もつかない。チュレラ・ヴェガと言う、非法
の組織の下請けの下請けに登録している立場だ。

チュレラ・ヴェガは他の組織、三合会^{さんごうかい}やシェロンの穴、イベア・フ
アマリアや黒の部屋^{ノールシャンブル}に比べれば、比較的良心的として知られている。
勿論、比較対象があまりにも外道と言うのは、この場合踏まえてお
かなければならないし、基本的に非合法である以上アブナイ仕事で
あることには変わりない。

そして、今日はそのアブナイ、チュレラ・ヴェガ本部からの言いつ
けで呼ばれていった。金にはなるが、もう二度と関わりたくない仕
事だったが、呼ばれたら断れないのも事実。そう思いながら、内な
る怒りを小石にぶつけながら彼女は歩いた。

「キモイ！あああキモイ。お風呂入った後また舐められたし、もお」

多少の変態ならば彼女は耐性がある、彼女は間違いなく売れっ子ではあったが、客を選べる商売ではない。その彼女にしても今日の客は変だった。

まず呼び出しの時に、化粧をしてくるなど言われた。ファンデーションなどは勿論、香水や整髪剤なども禁止、マニキュアなども無論駄目。おかげで、彼女は数年ぶりに完全すっぴんで人前に出た。学生の頃、それも相当幼い時以来だ。数年と言うのは、ちよっぴりサバを読んでいるが。

何よりも彼女が恐怖を感じたのは、捕食される恐怖だった。

その客は、髪を抜いて食べ、執拗なほど体を嘗め回し、口中から唾液を吸いだしては嚥下した。まるで肌をこそげ取るように歯をあて、肉の弾性を楽しむように舌先で押し、転がし、そして抉った。体中を賞味され、特に彼女の秘肉を舐めた時間は一時間を越えた。

特別料金で何時もの十倍、さらに前二日も幾らかの金を貰い待機になっていた。割りのいい仕事ではあったが、御免被りたい。あの、えさを観察する蛙の様な、どこか非人間的な表情は夢身が悪そうだ。

「そろそろ潮時かな。またあんなの来たら怖いし」

彼女ももう27だ。高級娼婦としては、けして若くない。しかし、他に食べる術を知らない、そう思い込んでいる彼女がこの世界から足を洗うのは難しい。誰かに落籍ひかされて、そのまま結婚か、あるいは妾か、そうなるならば話は別だろうが。

重いため息を吐きながら歩いていく彼女の頭上に、その時それよりも重い衝撃が降りかかった。

暗闇から飛んだのは、一本の針とそれに繋がるワイヤー。彼女の盆の窪に刺さった針は、ワイヤーを通して15万ボルト電圧を送り込む。ジャーミーは一瞬激しく痙攣を起こすと、その場に崩れるように倒れた。

雑居ビルの陰から現れた男は、無言のままジャーミーに袋を被せ連れ去ろうとする。袋に入れる手さばき、行動を阻害するためアルコールを駐車する手馴れた動きと、そのストイックさは彼がその道になれたプロであるう事を感じさせた。その時。

「面倒なんだけど」

やる気の無い、気だるげな声が聞こえた。

周囲に十分に注意していた筈なのに虚を突かれた男は、焦りを隠さず周囲を見渡した。すると、男が出てきた雑居ビルの陰とは逆の暗がり、そこに居た人影と目が合った。そしてその人影は言葉を続ける。

「面倒なのよ、分かる？ 私は気にしない、あなたが何処の誰でも、そこに倒れた女が何処の誰でも、そんな事は如何でもいい。問題はね、うちの近所で問題が起こった時、あの人が悲しむの。何か出来たんじゃないのかって。だからさ、面倒だけど止めてくれない、もしくは他の所でやってよ」

影は影のまま姿を見せず、ただその言葉だけは本心からの重みを持

って、あるいはそう思わせるだけの存在感を持って、影は語った。

男は恐怖と困惑で、混乱する頭を瞬時に回復させ整えた。プロフェッショナルの面目躍如と言えるだろう、もつとも、その時間を影が与えたと言う事でもあるが。

「誰かは知らないが、むやみに首を突っ込まないほうがいい。裏社会に睨まれたくは無いだろう」

ここまで言うのが男の精一杯の事だろう、自分が裏社会、つまりは何らかの組織に繋がっている事を匂わせるだけでも、大きな問題がある。彼としては、初手で相手を引かせるため、切れるだけのカードを切ったと言う事だ。つまり、問題が起こった時は、仲間から肅清されるだけのリスクを背負ったとも言える。

しかし、男の決意に対して返ってきた言葉はやはり気だるげだった。

「だから、聞いていない。さっきも言ったが、どうでも良いから。隠れて、静かに、こそこそと、そして出来れば離れた所で、そうしてくれれば文句は無い。その女を今回は見逃しなさい、今なら倒れている酔っ払いで話が済む。その為に打ったんでしょ、アルコールを」

その言葉に、男は実力行使もじさないと示すため、半身にかまえないフを取り出した。小型とは言え十分な殺傷能力と、十分な容量の龍珠りゅうしゅを持った龍理媒体りゅうり。示威としては十分なはずだった。

「止めなさい。あなたもプロなら無駄な事はしないほうが良い。この距離で直接かかってこないと言う事は、あなたがやれば負けると直感したから。その感覚、間違っではないから、ここは退いたほ

うが身のため」

その言葉を聞いた男は一気に加速、ナイフの柄に治められた龍珠が微振動、独死樟果獨斯の龍理を紡ぐ。ソマンの名で知られるP-メチルホスホノフルオリド酸ピナコリルは、世界最強の神経ガスの一つ。その即効性、致死率、そして対処の難しさは悪名高いマスタードガスやサリンをも凌駕する。

その必死の毒が影に襲い掛かる、はずだった。

「何!？」

男の必殺の龍理を阻んだのは、一本の鎖とその先に付いた龍珠。その龍珠は、すでに描かれていた男の龍理の式を破壊し、無意味な物へと変えた。瞬時に、そして静かに。

「あなたをプロと呼んだ。その事を訂正しなくてはならない」

男は恐怖に後ずさった。

「龍理と言うのは式。陰と陽二つの因子が描く式。そして、ある一定以上の完璧さを求めるが故、壊れる時はあまりにも簡単に」

後ずさる男を追うように、影もまたその影から歩み出た。

「問題はあなたの龍理の程度ではない。知らないと言う事、きちんとした教育を受けた龍理使いなら、あるいは本当のプロならば、こんな事は知っていて当然。基本として戦術の中に対処法と、その後策を持つはず。今、あなたが何も出来ない状態こそが、あなたがプロで無い証」

影から抜け出たアリは、その褐色の肌を闇夜に染めて深くしていた。夜の女王のように美しい彼女の姿でさえ、男にとっては恐怖という存在そのものに見える。男の口から細かい悲鳴が漏れた。

「頼い。そして面倒くさい。あそこで逃げていれば楽だったのに、面倒ごとを増やしたあなたを、あまり私は許したくない」

アリが再び鎖を振った時、紫電を帯びたその鎖は、先ほど男が女にしたように男を昏倒させた。もつとも、かかった電圧は桁違いに高いものだったが、気絶したと言ふ事には変わらない。

地面に倒れた袋を見て、ありはため息を漏らす。

「他の女を、私達の家には入れたくないのに」

そうこぼすと、ジャーミーを抱き上げて事務所兼自宅へと上がっていった。

連れて帰れば、この後帰宅するガンジユが世話を焼く事は目に見えている。それがとても面白くない、更には、二人の生活環境に何か、時に女が入ってくるのが何よりも気に入らない。しかし、このまま放つて置けば、ガンジユは気に入るだろうし、ガンジユに隠し事や嘘はつきたくない。そう思つての、嫌々ながらの行動だった。

当分目覚めそうに無い男の不幸は、アリとガンジユの自宅裏で行動を起こした事、そして、アリの機嫌が何時にも増して悪かった事。

運不運で言うなら、男にとっては不運だったのだろう、そしてジャーミーにとっては幸運だった。須らくではないが、男の不幸は女の

幸福に繋がるのだろうか、あるいは、その逆もまた。

二章 7・3 その社会と傷

「あれか？お前らは何か恨みでもあるのか？娘の結婚も、最近の体調不良も、妻が始めた格闘技式ダイエットも、全てお前達の呪いか？」

一旦帰ったはずなのに、ジャーミーを抱えアリを伴なって再び警察署に現れたガンジユを見たチュン総務部長は、頭から煙を上げんばかりに怒りながら、呪いの言葉を撒いている。

ちなみに、最近体重が気になり始めた奥様に、あなたも警官なんだからと言われ無理矢理つき合わされている格闘技式ダイエットは、長年の机仕事でなまった体に直撃している。

結果疲れがたまつて調子が悪いわけだし、娘さんの結婚が早いのは、恋愛の素晴しさを説いてまわる自称・愛と恋の伝道師奥様こと、チュン・リンカ夫人の影響が大きい。その呪いの文句はお前の嫁に言えと、その場に居た全員が思ったが、口には出さなかった。アリは言おうとしたが、ガンジユに止められた。

「お前らの周辺はあれか？悪名高い犯罪都市ボルファストと業務提携でもしているのか？だったらお前らのそばに、常に警官張り付けさせておこうか！」

怒り心頭と言うタイトルで、そのまま映像化できそうな部長を尻目に、ラデックを入れて三人は話し合っていた。ちなみにジャーミーはまだ寝ている。男の方も引き摺られてきて、今は留置所で夢を見ている。

「あの男の方も当分起きないでしょうし、如何しますかねえ。一番楽なのは、男の方だけ傷害で挙げて、女の方はお帰りいただくのが楽なんです。ちょっと当たった所があるんですよ。面倒ですが」

「お前が面倒と言う以上、俺たちにも関わりが無いわけではない、あるいは、言ったら関わりそうと思われるような案件じゃないかと推測される。反論は？」

どちらとも、言いたくない聞きたくないとは思いつつ、片方は職務上、もう片方は責任感から、それを聞く羽目になる。アリはその横で面倒くさげのため息をつき、部長の呪歌はまだ続いている。どうやら娘の結婚相手の愚痴へ、話題がシフトしたようだ。家庭内では言えないので、ついでに放出しているのだろう。

「遅かれ早かれ今週中には布告されるはずだったんですが、食祭シキマツの使徒が数名イーデンホールに入ったと言う未確認情報があります。人数などは不明なのですが、彼女が襲われた時の格好、化粧品などを排除した姿がそのメンバーの中の1人の嗜好と合致します。まだ、可能性だけの問題ですが、それでも低い可能性ではないのではないかと。彼女が売春婦であるならば、と言う註釈はつきますがね」

女性に対して、フェミニストであれと自らを教育しているラデックとしては、気絶している被害女性を確認もせぬまま売春婦ならばと言う事に不快感を示し、眉を顰めている。

「食祭の使徒か、暴食と暴虐の神を見たと言うアギリオに仕える者達。もつとも、アギリオは36年前に西都の魔人と呼ばれたポールデン特別査察官によって逮捕時の不幸な事故で死亡」

「と言うより、意図的に殺されたんでしょね。裁判になったときのジャブリオ共和国の死刑率は異常に低いもの。それに、裁判に掛かる時間も他国とは桁違いだね。私としては良い判断だったと思うけど」

ラデックはその言葉に頷くと、立ち上げた個人情報端末に一枚の画像を映し出した。

「しかしながら、彼の信奉者となった使徒は現在も多く残っています。むしろ増殖傾向にあるといっても良いでしょうが、その中でも大物が使徒と呼ばれ、その下位の者達は信徒と呼ばれます。そして使徒の中でもよく名前が通っている悪食あくじきドミリオがこの男です」

画像に映っているのは、高級そうなスリーピースのスーツにコートを羽織ったやや小太りの男。固太りとも言ってよい体格で、素性さえ知らなければ威圧感も覚えそうな、迫力のある中年紳士。その後ろには鳥の入った籠を持つ付き添い。

「これが五年前の顔」

そう言つて、端末を操作すると、次の画像が浮かび上がる。今度は、スマートな体形をテニスウェアのようなさわやかな服装で包んで、白い犬と散歩する好青年。年齢は如何見ても20代。世の娘さんが大騒ぎしそうなほどさわやかさと美しさを兼ね備えた美男子。

「これが三年前」

再び操作された端末が別の画像を呼び出す。そこに映っているのは、まるで少女のように可愛らしい少年。年齢は13歳から14歳と言う所だろうか。髪に光る天使の輪と、つややかな肌がその健康美を

あらわしている。ディスクを投げている先に居るのは、いわゆるフリスビードッグなのだろうか。

「これが二年前」

三度操作された端末には、今度は老人が映っていた。髪は白く、その肌には長い年月が刻み込まれたように深く、しわがよっている。腰も少し曲がり、年の頃は60を越えているのは間違いない。上品な好々爺のひざには、可愛らしい白い猫。

「これが去年の4月に撮られた最新の映像です。その後の行方は不明、現在の姿も不明。ちなみに、少年の時の画像には映っていませんが、この時は白いおそらくは豹と思われる動物にディスクを投げていたそうです。ただ、豹に在る黒い斑紋は無く、全身が真っ白だったそうですが」

流石に、この姿の変遷にはガンジユとアリも驚きを隠せない。まったくの別人でありながら、確かにそこには何らかの似通った印象が在る。それぞれが一堂に会していたならば、恐らく家族と思っただろう。祖父と父、そして兄と弟。そこには、はつきりとした係累としての近似性、血の繋がりのようなものが見て取れた。

「錯覚ではなく、別人と言う可能性。あるいは一族や集団で反抗に及んでいる可能性は？」

「ありえません。彼は、つまりここに映っている人物は全て1人暮らしたことが確認されて居ます。そして彼が行うのは猟奇犯罪です、集団による猟奇犯罪の可能性はとて低いと言うのは常識です」

ラデックは首を横に振る。

「模倣犯、あるいはその教義に従った反応としてならありえない話ではないわね」

再び首が振られる。

「彼は、全ての犯行現場に遺留品を残します。そしてその遺留品から得られた情報と、彼が住んでいた部屋に残されたそれは全て一致します。それは、ここに映る人物全てに共通しています」

「それは？」

アリの問いにつまるラデック。彼は咳払いを一つすると、端末の画像をさらに拡大、そして幾つかの事件調書を映し出す。

「彼の犯行と思われる事件は、確認された中で一番古いもので今から18年前に起こっています。アギリオの死後に使徒になった後期組と言われていますが、確証はありません。しかしながら、彼の犯行は非常に型にはまっています。被害者の特徴、被害時期、被害状況、その殆どが一致しています」

「被害者は女性、エリザ・クレイトン、スーン・ヤワパポーン」

「こちらも女性、グーン・トワイド、キャリーン・メロウ」

ガンジユとアリの呼び上げる名前は全て女性。そして年齢は25歳から33歳。そして職業は全て売春婦。

「ドミリオの犯行パターンは、数日前から確保しておいた高級娼婦

を呼び出し、相手をさせます。このときの特徴として、一切の化粧などを許しません。そして、その後女性を拉致。この後は多少の差があるようですが、最短で一日後に、遅くとも三日以内には女性の遺体の一部が発見されます」

「一部？さつき猟奇犯と言っていたな。犯行現場の写真は？」

顔を悪くしたラデックが操作した端末の映像は、さしものアリも息を呑むものだった。

「ドミリオは、拉致した女性を調理し殺害します。先に調理と言ったのは、彼が何らかの龍理ろんりで女性を調理中も生かし、その女性で作った料理を女性自身と共に食べるからです。その後、殺した女性の残った頭部に、ドミリオは自身の精液を使って化粧を施し料理した写真と共に並べます。壁に掛けられた紙には、その女性の味や料理の感想、更には殺した時の反応などが書かれています」

映し出された映像は、真っ白なテーブルクロスに残された女性の頭と花瓶、そして残さず平らげられた料理の載っていた皿と、料理の写真。ご丁寧に、高級ワインまで添えてある。壁に掛かった紙には、びっしりと女性の感想、いや、彼にとっての食材の感想。

「食人をする使徒は他にも数名居ます。しかし、彼が悪食と呼ばれるのは、娼婦を好んで喰らう事、そして彼自身が犯した娼婦を喰らう事、そこから来た他の使徒からの呼び名です。ドミリオ自身は、自らを美食家グルメと呼んでいます。男を多く知った女のほうが味が深くなって癖を持つと、それこそが美食だと」

食卓に飾られた女性の首は、自身を調理され喰らわされる狂気によって、歪み、笑っていた。涙の後の様にかけられた精液の化粧が、

女性の顔をいびつな泣き笑いへと変えていた。

二章 7-4 その社会と狭

世の中に貧富の差が存在する事を止める事は誰にも出来ない、そんな事は無いのかもしれないが、現実として貨幣制度が存在するより遙か以前から人類の歴史には貧富の差が存在した。

当然、富める者と貧しき者の必要とするものには差が存在し、需要も変化する。

そして、富める者の中でも一部の者のために存在する最高級の宿泊施設。

イーデンホールの本校門を右手に眺める大通りの一等地に存在する、ホテル・シエバンはその象徴とでもいふべき場所だった。

漂うのは高級な葉巻の香り、上質のブランデーの琥珀の色とそれを受け止める確かな質感と誇りを感じさせる調度品の数々。

高級を絵に描いた様な部屋で、その男もまた高級と言う言葉が似合っていた。

絢爛では無く、豪華や華美では決して無いが、酒の香りと同様に確かに立ち上る重厚感と威容。

品と知性を感じさせる30代の男が居るのは、ホテル・シエバンの最上層。一晚とまるのに10万デナール以上は掛かるスイートに当然の様に存在していた。

男を含めて全てが調和する室内で、違和感を感じるものが二つ。

一つは男の腕に巻きつく白い蛇。

そして、紅い箱から生えた男の首。

白い蛇の尾は紅い箱に刺さり、紅白のコントラストは美しい。もしも、それが単なる絵画であれば、そのように捉えることもできたかもしれない。

しかし、その箱から伝わる生命の躍動と、そのあまりにも血の色に似た紅さは直接目にする者にとっては嘔吐感すら覚えさせ、全身の皮膚は凍えるように毛を逆立たせるだろう。

首から下を箱に変化させた箱の男に、蛇を腕に巻いた紳士は話しかける。

すでに正気を手放した箱の男に、何を語った所で意味はあるまいに、男は淡々と語る。それは、無意味でありながら興味を持っていない学生にしつこく講義を繰り返す教授の姿に似通っているのかも知れない。

「私と言う幸福な人間は、すなわち幸福ではない君達とは隔絶した存在だと言える。我が尊師アギリオは、間違いなく世界の頂の能を持つ人間だった。しかし、尊師は崇高な理想と精神により決して幸福ではなかった。この点、つまり人生における幸福度の総量としてなら、私は尊師に勝っている」

彼が腕を伸ばすと、そこに巻きついた蛇は鎌首を持ち上げ、その口を開き牙を剥いた。

牙からは、紅い毒液とも血液ともつかぬ深紅の液体が数滴、滴り落ちた。

落ちた滴は箱の中に落ち、その紅さをさらに深い物へと進ませた。

「私と繋がる事は、それこそ唯一の幸福への道だ。この事は簡単に理解できるはずだ、そう、言うならば浸透圧の関係に近い。より大きく密度の高いものからその真髄は遷って行く。ただし、その繋がり方は一様ではない」

蛇の牙から落ちる滴を、ワイングラスで受けながらにこやかな表情の仮面を貼り付けた男の瞳は酷薄に細められる。

「さつきも言ったように、その量は勿論、密度にも様々な差異があるのだよ。私のものは結晶と言うべきだろうね。君達では、まあ希薄な気体と言う所だろうか」

液体の混ざったワインを、その喉に流し込みながら男の講義は続く。

「そしてその幸運は、いかに深く私との関係性を持つかと言う所に大きく依存するわけだ。量子論的な存在としての結合や親和ではない、もっと物質的で、言ってしまうえば即物的な関係性、それこそが私との関係性の深浅の差になる」

ここまで言って男はなぜか可笑しそうにひとしきり笑った。顔を歪めながら口元に手を当て、しばらくはその笑みが顔に張り付いていた。

「私はどうも人に何かを伝えると言うのが不得意のようだ。直感的

に物事を理解してしまうから、系統だった説明になり難い。天才ゆえの、そう言った物なのかも知れないが、君の様な愚者には、もっと簡単に伝えなければならぬね」

赤い液体と交じり合ったワインをグラスごと逆さまに反すと、箱の男に降りかけた。

「私の一部をその身に受ければ、幸せになることが出来る。そして、私の一部になれば、更なる幸せが訪れる。分かるかい？即座に最上の幸福を手中にする方法とは、すなわち私に喰われる事だ。もっとも、その荣誉は君には輝かない、残念だね」

男の顔には、芯から箱の男に対しての同情しか読み取れない。幸せを手に入れる方法を得ることのできない不幸な男、もっとも、男からすれば彼の血液を数滴身に受けただけでも十分な荣誉のはずだが。それでも、希望を与えるような。すなわち男から見れば、最上のこの上ない幸せがあることを箱の男に知らしめてしまったのでは、箱の男が満足しきれないかもしれないと同情的な気分になったのだろう。

男、すなわち悪食の名で知られるドミリオとは、彼の基準からすれば心優しく万人に愛を降り注ぐ天から舞い降りた御使いのような男だった。

あくまでも彼にとっての自分像ではあるが。

二章 7・5 その社会と歎

細い路地の中には、未だに朝日は入り込んでこない。しかし、普段は詰まった様な湿気をはらんだ路地の空気も、早朝の清清しさに染め直され、開け放たれた窓から入ってくる。

時刻は5時30分、早朝ではあり、前日遅くまで警察署で時間を拘束されていたはずではあるが、普段から少ない眠りに体を慣らしているガンジユにとっては十分な睡眠を取ったさわやかな目覚めだ。

傍らには、何時もと変わらぬ柔らかな肌触り。

一糸纏わぬ姿のアリが腕を絡ませ眠っている。その手が、シーツの中で伸びている先は少しばかり問題だが、それ以上の問題もある。

戦士として自身を教育し成長を遂げてきたガンジユは、無論眠っている中にあつても油断はしない。睡眠時や飲酒の時であっても第二の人格のように体を律する部分が存在している。

しかし、それはアリには働かない。

鍵をかけようが、周囲に警戒用のセンサーを張ろうが、目が覚めたときには傍らに居る。

最近では少しばかり諦めてしまった。

もっとも、その感情を察知した所為か、彼女の誘いは直接的になり、もろ肌露出は当たり前で、耳元に這う指、股間に招かれる自分の腕、

あるいは逆に此方を握り込む指など、激しい攻めを行ってくる。

それでも、最後の線を越えない彼女が、だからこそ愛おしい。

呼吸に合わせて穏やかに上下する熟成を経た美酒の如き褐色の肌を、諦めを含めた複雑な感情で見る。

ありが朝、傍らで眠っているのを見る度に、本当に良かったのかと何処かから起こる問いかけ。

（彼女は本当に望んでいたのか？）

（エゴと焦りで彼女を縛っているのでは？）

（そもそも俺は、本当に今でも望んでいるのか？）

最後の問いかけ以外への答えは自分の中には存在しない。

思う度に、胸中に、腹の中から湧き上がる黒い炎以外の答えを持ち合わせては居ない。

その度に。

その炎が舞い上がる時のその度に、自分は今でも憎しみを忘れては居ないと深く安心する。

今の自分の現状を肯定できる。

しかし、彼女は？

そこへの答えは自分の中へは見出せないままだ。

《けんごかん賢護官》は通称ではあるが、世界的に共通した、むしろ公称と呼んでも良いかもしれない名前。

イーデンホール特別自治領における正式名称は、

特例法第三条に基づいた特別検事並びに審査査問警邏官

当時の官僚が無い頭を捻りに捻って、無理やり付けた様子がありありと判る名称。

その無駄に長い名前の資格が、俺が長年追い、先頃漸く手に入れた資格の名前。

まず、得られる権利は武器の携帯並びに使用の無制限許可。

しかし、これだけならたいした資格ではない。イーデンホールでは特にだが、今の地球で自衛の手段をまったく持たない人間は少ない。

ろんり龍理を使える者ならば、その媒体としてじゅう龍珠の付いた武器を携帯するものも少なくない。

刀剣や槍、更には盾や鎧、2000年前なら時代錯誤のような甲冑を着込む者まで、ここでは珍しくない。

ろんり龍理が使えない者ならば、拳銃や特殊テイザーなどを懐に忍ばせているのも普通の事だ。

そのこと自体をとがめる警察も居ないし、それを咎める法も無い。

一般人にも、440ミリマルトまでの刀身の刀剣や6ミリマルト径までの拳銃であれば所持は許可されているし、講習を受ければ携帯することも可能になる。

第二種武器取り扱い免許を取れば、760ミリマルトまでの刀身と10ミリマルト径以下の銃器が、第一種武器取り扱い免許を取れば980ミリマルト以下の刀身であれば、槍などの長柄武器を含め全ての武器銃器の取り扱いが可能になる。

はっきり言ってしまうえば、それ以上に大きな武器になってくると、個人での運用は不可能になるし、意味もなくなってくる。

では、賢護官、特例法第三条に基づいた特別検事並びに審査査問警邏官のもっとも大きな権利とは何か。

それは、個人での捜査権、逮捕権、一部の司法権、刑の執行権を得ることだ。

賢智ファン・グーの残した唯一の悪法、あるいは大英断。

その個人に余る権能を、俺は望んで獲り。アリもそれを手に入れた。

この学院を中心とするイーデンホールで、高いと言う言葉では収まらないほどの淘汰圧を受ける勉学の道を走ったのも。

実際に血が煙り、砲声と怒号、死と雷火の支配する穢れ物との戦いを生き抜き、対人戦闘を含めた技能を修めたのも。

全ては、その資格を得るための踏み台だった。

その重い責任と義務を、過程と結果を、俺は憎しみを糧に乗り切った。そして、今からも乗り切っていく。

しかし、彼女は何を持ってその思いを、走る原動力を得て、今なお保っているのだろうか。

尋常の法を背に負わず人を裁く。

異常の法を背に、他人を暴き、傷つけ、時に殺す。

その覚悟が、望んだ自分にすらあったのか判らないその覚悟が、彼女にもあったと言えるのだろうか。

望まぬ彼女をここに引き摺り落とした俺が蟻地獄ならば、やはり蜻蛉として惨めに消えゆくのが運命さだめなのだろうか。

煩悶を繰り返す俺は、やはり弱くて苦しい蜻蛉でしかないのだろうか。

「あなたの悩みも苦しみも、私は」

褐色のまぶたが開き、アリは俺に微笑んだ。

二章 7・6 その社会と熱

「貴方の全ては私ためにある。悩みも悲しみも憎しみも怒りも、それは全て私の中に」

アリの体が摩り上がり、双丘に乗る二つの突起が俺の心臓を肌の上から貫く。

首に這う唇の快感に動けない俺には、催眠をかける様に脳の底に響くアリの声。

「貴方の悩みも想いも、全ては私の中に還って来る。だから、いつか貴方が私に墮ちる時」

アリの吐く息と、俺の呼吸が重なる。お互いの呼吸がその速さを増していく中、二人の体には暑い血が上ってくる。

「貴方の息を私は吸って生きている。でもね、それはいつか貴方に還す為。貴方が憎むように、私の愛も思う度に胸の中で燃え狂っている」

唇に割り込んだ舌が送り込んで来る唾液の甘さに脳が痺れる。これは恐怖なのだろうか、あるいは畏れか。

「貴方の望みも私の望みも、それは同じものではないの。始めから一つ。近似ではなく類型でもない、一つ」

胸を押し付けられ、口を塞がれたまま、脳天から降り落ちる言葉の

雨に打たれていた。

「何時の日か、貴方が私を刺し貫いて、この鼓動の中に入ってくる日を夢見ているわ。私の命も貴方の命も同じものなのだから、体が二つあることのほうが可笑しいのよ」

目には見えないはずなのに、アリの目が弧を描き深い笑みを浮かべているのがわかる。

「貴方の狂気も、私の愛も、全て束ねて一つの渦に」

抱きしめられる力が強まり。

彼女の鼓動が俺の頭を支配する。

きしむ骨の音、巡る血の音、激しく拍動する二つの肉の軋みが合致する。

こうして弱みを見せるのは、それはやはり俺の弱さで。

こうして自分の狂気をあえて晒してくれるのは、やはり君の強さなんだろう。

そして、君の語る狂気を、その愛を聞いて安心する俺は、一体何処まで弱い人間なんだろう。

見上げた俺の目に映るのは、胸の谷間から除く何処までも柔らかで深い君の笑み。

君が言うように、魂までも一つになれば何処までも素晴らしいのに。

それでも、復讐に縛られた感情と、君を壊してしまいたい感情と、君を壊すことの恐れが、俺を停滞させる。

それでもなお、俺を貫く君の視線が、何処までも暖かいから。

この時々訪れる二人の儀式が、俺をここまで運んでくれた。

俺にとっての全知の女神が目の前にいる幸運を、感受しない愚か者は、何処に堕ちるのだろう。

「貴方と私は、刺し貫かれて一つに堕ちる。何処に居たって変わらない、望むならば、世界なんて要らないのだから」

それでもやはり、狂気を零す君の唇は笑っている。

二章 7・7 その社会と招

「おや？」

ドミリオは自身の話を止めて首をかしげた。今まで、辛うじて細い糸で繋がっていた箱の男の何かが完全に壊れたことを感じ取ったのだ。

「困るね。人がまだ説明している途中なのに。講義を最後まで聞かない生徒には、居残り補習をさせるかな？」

精神と肉体、あるいは魂の糸が切れた男は、その言葉に答えようも無い。苦痛が狂気に見開かれた目は白目を向いたまま、涙のあとを残して固まっていた。

「しょうがないね、君は居残りだ。運が悪ければ使われるだろうけど、君は幸運みたいだから、ずっと私と一緒に居れるかも知れない」
ドミリオの伸ばした腕に絡みついた蛇が、生物としてはありえないほどの伸張を見せる。龍が顎を開くように、細かったはずの蛇の頭は大きく縦に開いた。

長い下を使って、器用に箱を飲み込んだ蛇は、今度は物理法則を無視して元の大きさに戻る。質量保存の法則を無視した蛇は、爬虫類独特の無反応さでそのまま鎌首を下げた。

グラスを回しながら、あまりにも穏やかに笑うドミリオは、ゆっくりと呟いた。

「新たな生徒を連れてくるべきか？それでは人選は如何でしょうか？」
やや芝居気を加えて、指を鳴らすとさらに言葉を続けた。

「そうだ、私のダイナーと彼女の幸せへの道を邪魔したと言う、彼らを生徒として招こう。聞く所によると、彼らは学門の徒らしい、良い生徒になるだろう」

クツクツと笑うドミリオにあわせて、深紅のワインが深紅の波紋を作る。

「世界の全てを幸福にする大事業、問題となるはずの時間ですらも私の前にはすでにひれ伏した。まったく、尊師アギリオは素晴らしい集団を作ったものだ。倫理に縛られない実験と、倫理をあえて壊す有能者の集まり」

肩が振るえ、より深く激しくワインが波立つ。

「尊師、私は貴方に同情する。もしも生きていれば、その功績を持つて貴方も幸福に出来たのに。つくづく運の無い人だ」

自ら尊師と崇めておきながら、ドミリオの言葉には敬意と言う者が感じられなかった。

しかし、親愛と、そして憐憫と同情の念だけは間違いなく感じる事ができた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3388u/>

獅子の門前を眺め 竜の背を渡る

2011年7月29日12時57分発行